琉球大学学術リポジトリ

サンパウロ大都市圏におけるフェイラと沖縄県出身のフェイランテ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 伸三, 米盛, 徳市, Shimabukuro, Shinzo, Yonemori, Tokuichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15631

サンパウロ大都市圏における
フェイラと沖縄県出身のフェイランテ

島袋伸三・米盛徳市

The Feiras－Livers and Okinawan Feirantes in the Grande São Paulo, Brasil

SHIMABUKURO,Shinzo and YONEMORI,Tokuichi

目　次

Ⅰ．序 …… 58
Ⅱ．フェイラの発生とその地域的拡大 …… 58
Ⅲ．現在のフェイラとフェイランテ …… 61
Ⅳ．戦前・戦後移民のフェイラを中心とした職業変遷 …… 67
Ⅴ．渡航形態と居住地 …… 74
Ⅵ．フェイラへの従事状況 …… 77
Ⅶ．職業・居住地の変遷回数 …… 80
Ⅷ．平均在職年数と居住年数 …… 81
Ⅸ．居住地域の移動変遷 …… 82
Ⅹ．模合・現地金融機関の利用状況 …… 84
Ⅺ．渡航前の職業・本籍地・出生地 …… 85
Ⅻ．フェイランテの経済活動状況 …… 88
XIII．総括 …… 94
謝辞 …… 96
注 …… 96
参考文献 …… 96
写真 …… 98

Ⅰ．序

1978年６月、「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」の予備調査においてブラジルの日系移民70周年記念式典に参加するためにブラジルに入国した。その際、サンパウロ市において沖縄県出身移民と最初に出会った経済活動がフェイラの仕事であった。早朝のフェイラ（露店市）は活気に満ちた通りの市場で、働いている移民の姿に強烈なそして鮮明な印象を受けた。一方、この市場景観は、日本各地にみられる朝市や、かつて盛んに実施された定期市を想起させるものがある。

これまで、ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷[(1)(2)]についてアンケート調査による資料に基づいて分析考察を行ってきたが、今回は都市の職業の事例研究としてフェイラとフェイランテについて調査した結果をまとめてみたい。

前述したように巨大都市サンパウロ大都市圏の通りで行われるフェイラの規模はかなり大きく、その経済的活動は都市居住者と農業生産者と密接なかかわりがあると想像される。このブラジル独特の露店市の実態についてみる前に、フェイラについて、サンパウロ大学地理学研究所から出版されたOlmaria Guimaraesによる「サンパウロ市におけるフェイラの創設に関する研究[(3)]」を中心に概観しておきたい。

Ⅱ．フェイラの発生とその地域的拡大

サンパウロが都市発展をとげ、17世紀に至り、通りや教会前のプラザにおいて遠方からインディオは陶器を持ち寄り、黒人女性は食料品や日用雑貨、そして農民は農作物を売りだした。当初は祝祭日にこのような出店ができた。その場所は同時にお祭のダンスやその他の催し物で賑わった。やがてこのような縁日的な特徴をもつ出店は定期的性格を具備し、特定の場所における露店市が形成されるようになった。

18世紀後半に入ると、サンパウロ市 Centroの黒人が集中している Rua de Quitandaの通りに素朴なカシンニャ（Casinha）と呼ばれる小屋が並ぶ市場が出現する。1773年頃にこの通りに13のカシンニャがあったという。

やがてカシンニャの市場はサンパウロ市街地のいくつかの場所に開設され食料を中心に露店市が形成された。

しかし、19世紀末に至り都市化が進行する通りで豚やその他の家畜類が商品として市街地に持ち込まれるとカシンニャ市場の衛生環境が市民および市当局によって問題視されたことは容易にうなづける。

その結果1907年にはこれまでの小売商（varejo）を法的に制度化し、市街地における公設市場（mercado）設置法案が成立した。サンパウロ市の市街地が外部に拡大するにつれ食料供給のため近郊農業が発達する。一方では、公設市場の範囲からはずれた新興市街地に対する食料品を中心とする日用雑貨のサービスは農民や黒人による広場や通りで開設される農民市場に依存し、農家による農業生産物の販売商行為は定着化していく。都市の拡大に伴い公設市場圏からはずれた新興都市地域は農業生産者を主体とするこのような自由市場がサンパウロの都市社会で重要な機能を担うようになった。そしてこの農民市場がサンパウロ市の発展とともに必要不可欠の機能と役割をはたした実績が世に認められその結果農業従事者を主体とする自由露店市場Feira－Livreの設立法が1914年にサンパウロ市長Washington Luiz P. de Souzaの下で制定された。

同年、General Asorio 広場に26人、Largo de Arouncheに116人のフェイランテ（露店商人）が出現し、まもなくしてMarais de Barros広場、São Paulo広場、São Domingos通りにもフェイラが出現した。1915年には7ヶ所の広場にフェイラが成立した。フェイラにおける取扱い商品は食料品に関する限り特に制限がなかった。市場開設時間は朝6時から11時までが定着し、市場開設頻度は週1回から2回が一般化し、市場を開設する広場も次第に固定していく。

フェイラにおける有利な場所の取得は当初早く所定の場を得る早いもの

勝で市場の店開きが運営された。市場はその都度、市当局の監視官の下でわずかの広場使用料金を支払った。

1934年には食料品以外の日用雑貨の商品取扱いが許可され、取扱商品の免許登録制度が制定されるようになると、取扱商品、特に肉や魚を中心とする生鮮食料品の衛生検査と計量機器の登録が義務付けされるようになる。1949年に至り週単位で各地区において自由露店市場が市長によって制度化された。市場開設時間も12：00まで延長が認められた。

その後、家内工業製品や自家製品、福祉施設において造られた製品のフェイラにおける販売が許可されるなど、フェイラにおける取扱品も増加し多様化していった。

現在各地で開設されているフェイラが法律的に制度が確立したのは1964年4月15日の布告第5841号の発布からである。自由市（Feira－livre）はそれまで市当局の規制監督が徹底していないため食料品や市場の衛生問題、開設場所の混乱が惹起するなどの問題が都市の人口増加に伴ってフェイラの増加とフェイラの制度化を要請した。上記布告によるフェイラの設置場所の基準として、人口密度を考慮してフェイラの空間配置を行うこと、予定した地域に適当な場所があること、地域住民からフェイラ設置要請があること、地域行政機関が目指す公益性とフェイランテの利益を考慮することなどが明文化された。

さらに、フェイラの設置場所について次のような詳細な条件が明記されている。フェイラは教会寺院に接近してはならない。学校に接近しないこと、都心に近接して開設しないこと、概存のメールカード（公設市場）に近接しないこと、フェイラとフェイラは少なくとも1500メートルの間隔をもつこと、同一地区に2つ以上のフェイラを設置してはならない。墓地に近接して花を専門に取り扱うフェイラを設置し、開設時間を6：00から16：00までとすること。フェイラの配置はchronological orderとすること。取扱商品の配列は魚、肉、臓物、鶏肉、バナナ、ジャガイモのように、汚れを伴い易い商品から手軽に扱える商品の順序で行うことなどが挙げられ

ている。

その他に、1964年現在の露店市商人（フェイランテ）の免許を有する者は身体検査証明書を得ること、フェイラ登録証明書をフェイラにおいて掲示することが義務づけられている。登録証明書には、住所、フェイラで取り扱う商品名、フェイラの1週間の場所の名称が記入されている。

Ⅲ．現在のフェイラとフェイランテ

始めに、日本語で露店市と呼ばれているブラジルのフェイラ（Feira－Livre）の定義をみてみよう。

> フェイラとは土地の主産物を販売するために使用する市場、通りの場所である（Santana, Nuto 1944）。

> フェイラとは公共の場所で、時にはテントなしで、生鮮野菜や果物を主に商品を販売する市場をいう（Ferreira, Aurelio Burarpue de Holanda,1975）。

> フェイラは消費者に対する複雑な供給システムのひとつのシステムとして機能し、特定の卸機関から提供を受けた商品を消費者へ小売する自由市である（Guimaraesu, Olmaria, 1969）。

以上、フェイラの定義を3つ提示したが、ここで共通項を挙げてみると、フェイラは公共の空間を利用して開設され、野菜や果物を主体とする日常必需品を販売する自由市であるといえる。また、従来のフェイラを開設する時間が早朝から正午までが一般的であることから朝市として捉えることができよう。しかし、時には夜市を開設することがある。1978年6月にマット・グロッソ州、現在南マット・グロッソ州の州都カンポ・グランデ市で

夕方から翌日の朝まで開設しているフェイラを廻ったがこのような開設時間は特異な事例であるといえよう。

フェイラは通りや広場で開設される自由市であり、それは1週間を1周期としてフェイランテは毎日異なる通りや広場で市を開設するのが一般化している。ちなみにFeiraはポルトガル語で週を意味する単語でもある。現在は火曜日から日曜日の6日間を1サイクルとし、月曜日は休日となっている。以上のことからフェイラは1週間をサイクルとする定期市的機能を具備した自由市場であるといえよう。なお、フェイラは小売行為をする市場としての機能の他に市民相互の情報交換の場であり、フェイラに参加する全ての人々への飲食サービス機能をも具備している。また、フェイラは買物をしながら市の賑わいをフェアとして興楽の場所ともなっている。

現在のフェイラについてサンパウロ州農務局サンパウロ大都市圏市場課のフェイラに関する条項（1977年5月）[4] からみてみよう。

市長は各地区（bairro）にフェイラの管理を委嘱し、当局はフェイラの使用料（フェイラの掃除費用）の徴収、フェイラの衛生問題などを考慮して都市環境の維持改善の立場からフェイラ設置の許可を決定する権限を有する。しかし、州都サンパウロ市は1974年8月2日の布告11199に基づいてフェイラ開設に関する詳細な条項が決められている。それによると、フェイラは時代と共に変化し、その結果フェイラの都市空間における配置、機能や形態の変化することに認識すべきであるという立場をとる。自由市であるフェイラは公共に開放しなければならない。何故なら、フェイラは市有地の道路、広場で開設される市であるから、フェイラ開設の場所は、主要幹線道路から100m離れた場所で行うこととしている。

布告により、取扱商品およびサービスは15項目が許可されている。なお、バンカ（売場面積の単位）数はそれぞれの取扱商品の種類によって異なる。フェイラは布告により3つのクラスに分類される。分類方法は道路や広場一帯に立地する既存の商店の取扱商品内容を考慮し、かつ一帯の人口密度、地域住民の経済的社会的ステイタスや交通量などを検討して決定する。

当布告はフェイランテが2つ以上のフェイラを持つことを禁止する。また、フェイラは原則として家族労働による商行為であるから戸主は家族と雇用者が当該フェイラに就労するための証明書を得なければならない。ちなみに、1968年の資料によると、フェイラにおける就労者のうち40%は戸主と親戚関係にあたる者、60%は家族の手伝いによるものであった。

表1に示すように1976年にはサンパウロ市に538ヶ所のフェイラが開設されていた。フェイラの数は年を追って増加している。例えば、1967年のフェイラは315ヶ所、1972年には398ヶ所であった。サンパウロ市では現在一日平均90ヶ所でフェイラが開設されている。就中、日曜日101ヶ所、火曜日94ヶ所、土曜日80ヶ所でフェイラが開かれている。

表1　サンパウロ市における地区別フェイラの分布（1976）

地　　区	地区名称	フェイラ数
Butantã	BT	23
Campo Limpo	CL	22
Freguesia do O	FO	38
Itaquera／Guaianazes	IG	14
Ipiranga	IP	43
Lapa	LA	21
São Miguel／Ermelino Matarazzo	ME	22
Mooca	MO	52
Penha	PE	56
Pinheiros	PI	16
Pirituba／Perus	PP	25
Santo Amaro	SA	51
Se	SE	18
Santana	ST	66
V. Mariana	VM	44
V. Prudente	VP	27
合　　計		538

出所:Secretaria da Agricultura do Estado de São Paulo,1977,P.28

フェイラのクラスは次の通り取扱商品によって区分されている。

Aクラスの取扱商品

野菜、果物、卵

Bクラスの取扱商品

野菜、果物、卵、穀類、乳製品、缶詰、香辛料、調味料、燻製品、生麺（ペイスト）、石鹸、洗剤、ホーキ、ブラシ等

Cクラスの取扱品

Aクラス　Bクラスの取扱商品に加えて、衣料品、玩具、裁縫用品

サンパウロ市におけるフェイラのクラス別分布を表2によってみると、Cクラスが全体の84%を占め、Bクラスが10%、Aクラスがわずか6%の割合となっている。さらに、各クラスのフェイラの地域分布についてみると、縁辺部と中間部に最も多く分布している。この中間部には全体の56%のフェイラが集中しており、そこにはCクラスのフェイラの57%、Bクラス60%、Aクラス33%が分布している。郊外と都市縁辺地域に分布するフェイラはぜんたいの34%を占め、かつCクラスが全体の39%を占め、Bクラスが13%で、Aクラスのフェイラがみられない。一方、都心部におけるフェイラは全体のわずか10%しか分布しない。Cクラスは全体の0.4%、Bクラスが27%であるが、Aクラスは67%と高い割合となっているが都市域の地域的要求に即した立地といえる。

表2　州におけるフェイラの地域別・クラス分布（1976）

クラス	地域			
	都心部	中間部	縁辺部	合計
A	20	10	−	30
B	15	33	7	55
C	19	251	171	441
合計	54	294	178	526

（＊）現在試験的に行っているフェイラは含まない。
出所：Secretaria da Agricultura do Estude de São Paulo、1977、P. 29

フェイランテ（露店商人）は1976年には10,887人が登録されていた。現在はこの数よりかなり増加していることが推測される。一方バンカ数は、複数の規格があるが、全体で約55,000から60,000と推測されていた。フェイランテが取り扱う商品により01から15までの種類にグループ分けされ、それぞれの当該商品の販売が許可される。各商品を扱うフェイランテ構成を表3からみてみよう。

表3　取扱商品分類別フェイランテ数（1976）

分類	商品	フェイランテ数	%
01	野菜	2,893	26.57
02	果物	2,740	25.16
03	卵	294	2.70
04	魚	146	1.35
05	肉	250	2.30
06	花	130	1.20
07	生活保護対象	18	0.16
08	穀類	491	4.50
09	ジャガイモ・玉葱・ニンニク	1,018	9.35
10	乳製品	159	1.46
11	麺類	184	1.70
12	ソーセージ	342	3.15
13	コーヒー	73	0.67
14	日用雑貨	218	2.00
15	衣料品・裁縫用品	1,931	17.73
合計		10,887	10.00

出所：Secretaria da Agricultura do Estado de São Paulo、1977、P. 29

その中で、野菜を取り扱うフェイランテが全体の26.6%を占め、2位の果物フェイランテ（25.2%）を含めると両者で全体の51.8%を占める。このことからフェイラが生鮮食料品中心の市場であることがわかる。他に食料品にはジャガイモ・玉葱・ニンニク（9.4%）、穀物（4.9%）、燻製品（3.2%）、卵（2.7%）、乳製品（1.5%）、肉類・鶏肉・臓物（1.4%）などを含めると食料品はフェイランテが取り扱う商品の約80%を占める。他に顕著な取扱商品として衣料品、玩具、裁縫用品が全体の17.7%をも占めているのが挙げられる。石鹸、洗剤などの日用雑貨2%を占めており、食料品の買物のついでに日常生活の雑貨をも求めて客が集まるフェイラは各地で賑わう。

以上のようにフェイラの区分から次のことが明らかとなる。つまり、公設市場や商店街、大型店舗の発達している都心地域よりも、中間地域や低所得者層が集中している郊外や都市縁辺地域におけるフェイラは取扱商品の種類も豊富で、かつフェイラの規模も大きくなる。さらに都市の低所得者層に安価な食料品と日用雑貨を提供することによって彼等の生活を擁護することを主要目的としてフェイラが実施されていることがうかがえよう。

サンパウロ市のLiberdade通りの地下鉄駅前からGalbão Bueno通りにまたがる広場、プラサ・デ・ヘプブリカ（Plaza de Republica）、パウリスタ（Paulista）通りのサンパウロ近代美術館の階下とその付近で開設される通称「ドミンゴフェイラ（Dominngo Feira）」は取り扱う品物が原則として自家製品の家具、玩具、皮革製品や植木、鉢物などに加え飲食の出店を伴う日曜日のみの市である。

現在では上記の取扱品の他に絵画、骨董品、宝石製品などもみられる。場所によっては広場での音楽、ダンスが催されフェイラも賑わっている。

然し、ドミンゴフェイラは本稿で取り扱うFeira－Livreとは別の市であり、商人のフェイラ組合への参加もない。最近ではこのようなドミンゴフェイラに加えて、市民が公園や公共施設の駐車場で自らの車両を売買する形態のフェイラも出現している。

Ⅳ．戦前・戦後移民のフェイラを中心とした職業変遷

既報「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」（1981年3月及び1986年3月）では、フェイラにおける具体的考察を行う機会がなかった。そこで本節では特に、戦前移民及び戦後移民でフェイラに従事した経験のある者（以下、「フェイラ関係者」という。）を抜粋し、職業変遷のプロセスの跡づけの一端を試みるものとする。表4にフェイラ関係者の男女別構成を示してみた。

職業別分類は一般に使われている産業分類（農業、林業、水産業、鉱業、建設業、製造業、卸小売業、金融・保険、不動産業、運輸・通信、サービス業、電気・ガス・水道、公務員、その他、無職の15分類）に基づいているが、ここではこれらをさらに下記のように6分類した。なおアンダーラインの部分は各分類中の代表的な職業である。

1　農業（野菜、米、コーヒー、棉花、サトウキビ、果樹、その他）
2　製造業（食糧品、繊維・衣服、金属・機械、その他）
3　サービス業（事務職、その他）
4　フェイラ
5　その他の卸小売業（フェイラを除いたもので、卸業、百貨店・スーパー、衣料品、飲食料品、飲食店、雑貨店、家具・建具、その他の小売、メルカード）
6　隠居・その他（無職・隠居、建設業、不動産業、運輸・通信、その他）

表5は年毎にみる戦前移民のフェイラ関係者の職業変遷状況を、さらに表6は戦後移民のフェイラ関係者の職業変遷状況をみたものであり、図1及び図2はこれらを図化したものである。なお、戦後移民のブラジル調査のサンプル総数は527であるが表1では526となっており、これはアンケート調査で一部分において十分な聴取ができなかったことに起因している。

しかし、分析・考察においては大きな意味をあたえていないと考える。

フェイラ関係者の戦前移民における男女別構成は総数142人中、男133人、女９人、また戦後移民は総数142人中、男130人、女12人となっている。ちなみにサンプル総数は戦前移民が527人、戦後移民が272人である（表４参照）。フェイラ関係者の比率は戦前移民が26.9％、戦後移民が52.2％であることからしても戦後移民にとってはフェイラが如何に重要な職種であったかが分かる。

表４　フェイラ関係者の男女別構成

	フェイラ関係者			調査対象者		
	男	女	計	男	女	計
戦前移民	133	9	142	481	46	527
戦後移民	130	12	142	248	24	272
合　計	263	21	284	729	70	799

フェイラ関係者とは前述で定義したようにフェイラに従事した経験のある者をさし、戦前移民の職業変遷は1908～1980年の73年間、戦後移民の場合は1949～1984年の36年間の推移を包含したものである。

戦前移民の場合フェイラ従事者が確認されたのが1925年（1908年より17年経過した後）であり、その後徐々に増加したもののフェイラ従事者が10人（但し経営主であり家族従業員は含まない）となったのが1947年（1908年より40年経過）である。1925年はサンプル総数125人のうち１人(0.8％)であり、1947年はサンプル総数502人のうち10人(2.0％)と極めてスローテンポであった。しかし20年後の1967年（1908年より60年経過）にはサンプル総数526人のうち76人（14.4％）とピークをなしている。その後は隠居等により1980年には49人（9.3％）と減少する結果となった。戦前移民の場合の特徴は、1943～45年を境に農業からフェイラ及びその他の卸小売業への職業の転換がみられることと、

表5　戦前移民のフェイラ関係者

年	サンプル総数	フェイラ関係者	卸小売以外の職業				卸　小　売	
			農業	製造	サービス	隠居・他	フェイラ（経営主）	その他の卸小売
1912	7	1	1					
1913	7	1				1		
1914	8	2	1	1				
1915	8	2	1	1				
1916	9	2	2					
1917	47	6	5			1		
1918	90	20	19			1		
1919	103	22	20		1	1		
1920	107	22	20		1	1		
1921	109	22	20		1	1		
1922	111	22	18		1	2		1
1923	114	22	20		1	1		
1924	117	22	20		1	1		
1925	125	24	21		1	1	1　(1)	
1926	157	29	23		1	3	2　(2)	
1927	179	33	26	1	2	1	3　(3)	
1928	191	35	28	1	2	1	3　(3)	
1929	223	49	41		2	1	3　(3)	2
1930	245	58	48		2	2	4　(4)	2
1931	267	64	52		2	4	4　(4)	2
1932	292	71	57		3	3	5　(5)	3
1933	322	78	64		4	2	5　(5)	3
1934	398	98	80		4	5	4　(4)	5
1935	435	113	88	1	5	8	4　(4)	7
1936	460	122	93	1	6	10	4　(4)	8
1937	474	126	99	1	6	9	4　(4)	7
1938	480	127	104	1	6	6	4　(4)	6
1939	488	129	102	1	6	6	6　(6)	8
1940	498	134	106	1	6	7	7　(7)	7
1941	501	134	105	1	5	8	7　(7)	8
1942	501	134	106	1	5	6	8　(8)	8
1943	501	134	112	1	2	3	9　(9)	7
1944	501	134	110	1	2	4	9　(9)	8
1945	501	134	109	1	2	4	9　(9)	9
1946	501	134	105	1	3	5	8　(8)	12

表5（続）　戦前移民のフェイラ関係者

年	サンプル総数	フェイラ関係者	卸小売以外の職業				卸　小　売	
			農業	製造	サービス	隠居・他	フェイラ（経営主）	その他の卸小売
1947	501	134	101	1	4	4	10　(10)	14
1948	501	134	94	1	4	4	14　(13)	17
1949	501	134	93	1	5	5	15　(14)	15
1950	501	134	91	1	4	3	18　(17)	17
1951	501	134	87	1	5	4	19　(19)	18
1952	502	134	81	1	3	4	25　(25)	20
1953	502	134	80	2	2	3	29　(29)	18
1954	502	134	75	1	2	4	35　(35)	17
1955	503	134	73	1	2	3	36　(36)	19
1956	505	134	70	1	1	2	41　(41)	19
1957	509	136	67	2		1	48　(47)	18
1958	515	137	62	3	1	1	53　(51)	17
1959	517	138	56	3	1	2	58　(56)	18
1960	523	140	45	2	3	4	63　(62)	23
1961	524	141	34	6	4	6	66　(65)	25
1962	526	142	33	7	4	6	65　(64)	27
1963	526	142	28	10	6	7	65　(65)	26
1964	526	142	24	12	6	7	67　(67)	26
1965	526	142	21	14	6	8	69　(69)	24
1966	526	142	17	13	6	9	73　(73)	24
1967	526	142	13	13	5	13	76　(76)	22
1968	526	142	12	15	5	14	75　(75)	21
1669	526	142	11	16	5	14	76　(75)	20
1970	526	142	9	13	5	21	73　(71)	21
1971	526	142	9	13	5	25	70　(68)	20
1972	526	142	7	14	4	27	69　(67)	21
1973	526	142	6	14	3	35	67　(66)	17
1974	526	142	6	14	3	38	63　(62)	18
1975	526	142	6	11	5	43	60　(59)	17
1976	526	142	6	10	5	48	57　(56)	16
1977	526	142	5	9	5	54	55　(54)	14
1978	526	142	5	7	3	57	55　(54)	15
1979	526	142	6	8	3	62	49　(49)	14
1980	526	142	6	8	3	62	49　(49)	14

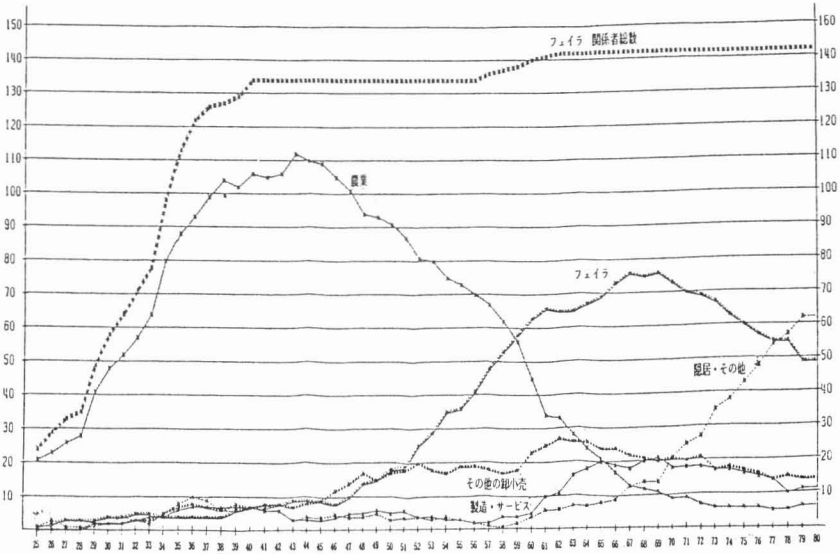

図1　戦前移民のフェイラ関係者の職業変遷状況

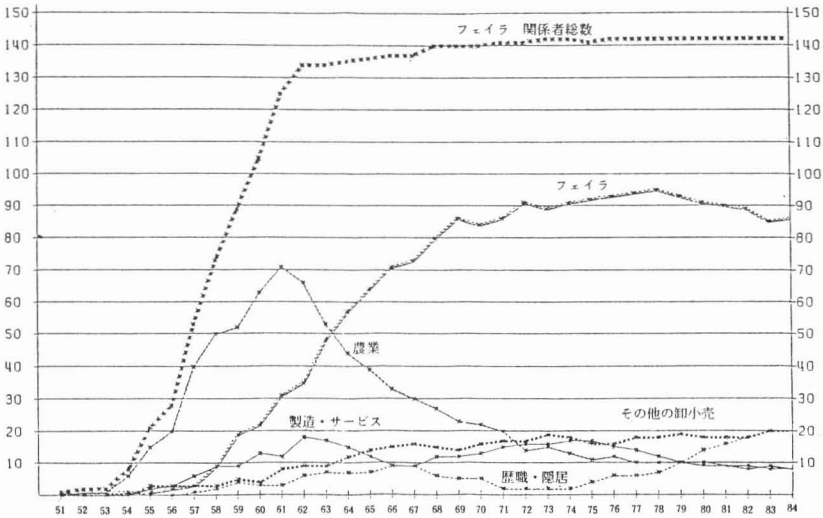

図2　戦後移民のフェイラ関係者の職業変遷状況

表6　戦後移民のフェイラ関係者

年	サンプル総数	フェイラ関係者	卸小売以外の職業				卸　小　売	
			農業	製造	サービス	隠居・他	フェイラ（経営主）	その他の卸小売
1949	1							
1950	1							
1951	2	1					1　(1)	
1952	5	2	1				1　(1)	
1953	8	2	1				1　(1)	
1954	24	8	6			1	1　(1)	
1955	48	21	15	1	1		1　(1)	3
1956	65	28	20	1	2		2　(2)	3
1957	109	53	40	3	3	1	3　(3)	3
1958	155	73	50	4	5	2	9　(8)	3
1959	188	89	52	5	4	4	19　(16)	5
1960	212	105	63	9	4	3	22　(19)	4
1961	242	125	71	9	3	3	31　(29)	8
1962	256	134	66	13	5	6	35　(32)	9
1963	258	134	53	12	5	7	48　(43)	9
1964	259	135	44	12	3	7	57　(52)	12
1965	260	136	39	9	3	7	64　(59)	14
1966	261	137	33	6	3	9	71　(67)	15
1967	262	137	30	7	2	9	73　(70)	16
1968	265	140	27	9	3	6	80　(76)	15
1969	266	140	23	9	3	5	86　(84)	14
1970	268	140	22	9	4	5	84　(81)	16
1971	270	141	20	11	4	2	86　(83)	17
1972	270	141	14	12	4	2	91　(90)	17
1973	272	142	15	13	3	2	89　(88)	19
1974	272	142	13	13	4	2	91　(91)	18
1975	271	141	11	13	4	4	92　(92)	16
1976	272	142	12	13	2	6	93　(93)	16
1977	272	142	10	12	2	6	94　(94)	18
1978	272	142	10	9	3	7	95　(95)	18
1979	272	142	10	9	1	10	93　(93)	19
1980	272	142	9	9	1	14	91　(91)	18
1981	272	142	9	8	1	16	90　(90)	18
1982	272	142	8	8	1	18	89　(89)	18
1983	272	142	9	8		20	85　(85)	20
1984	272	142	8	7	1	20	86　(86)	20

1967〜69年を境にフェイラから隠居・その他への職業の転換がみられることである。

一方、戦後移民の場合はフェイラ従事者が確認されたのは1951年（1949年より2年経過）であり、その後急激に増加しフェイラ従事者が20人近くなったのが1959年（1949年より9年経過）で、フェイラ従事者が95人でピークとなったのが1978年（1949年より30年経過）である。1951年はサンプル総数2人のうち1人であり、1959年はサンプル総数188人のうち19人（10.0%）、1978年にはサンプル総数272人のうち95人（34.9%）とピークをなしている。その後は隠居等により1984年には86人（31.2%）と減少する結果となった。

戦後移民の場合の特徴は、1961年頃までフェイラ従事者と農業従事者がほぼ並行して増加し、その後は急激な農業からフェイラへの職業転換がみられることである。

フェイラの職業の地位においては経営主が殆どであるがこのことは調査対象者が戸主であることから当然の結果である。経営主でない場合は調査対象者が女性か、あるいは年齢が若かった為に手伝い、従業員、または共同経営者であったと推測される。しかしこれらの期間は非常に短期間であるようにうかがえる。なお表7及び8はフェイラ関係者の渡航年と渡航時の年齢構成を示したものである。

表7　フェイラ関係者の渡航年

渡航年	1915以前	1916〜25	1926〜35	1936〜45	1946〜55	1956〜65	1966〜75	1975以降	計
戦前移民	3	21	90	20	0	8	—	—	142
戦後移民	—	—	—	—	22	112	6	2	142
合　計	3	21	90	20	22	120	6	2	284

表8　フェイラ関係者の渡航時の年齢

年　齢	10未満	11〜20	21〜30	31〜40	41〜50	50以上	不明	計
戦前移民	7	70	60	3	2	0	0	142
戦後移民	0	25	66	31	17	2	1	142
合　計	7	95	126	34	19	2	1	284

なお渡航時の婚姻状況は未婚者が戦前移民で80人（56.3%）、戦後移民で71人（50.0%）、既婚者が戦前移民で58人（40.8%）、戦後移民が70人（50.0%）である。

戦前移民の渡航時年齢が20歳未満が77人（表5参照）で渡航時の未婚者の80名に近いことは、いわゆる「構成家族」、「契約移民」の都合上、就学半ばにしてブラジルへ移民せざるをえなかった為である。そのため教育歴は小学校が129人（90.8%）である。

一方、戦後移民の渡航時年齢は満20歳未満が25人で未婚者の71人をはるかに下回っている。これは「自由移民」として大陸に希望を持ちブラジルへ移民した結果である。

V．渡航形態と居住地

職業の変遷回数・在職期間及び居住地の移動回数・在住期間は、最初の入植地から現在いわゆるサンパウロとその周辺のサンパウロ大都市圏に至るまでの地域的移動におおきく影響されるものである。

表9は戦前及び戦後移民のフェイラ関係者の渡航形態をみたものであるが、戦前移民の場合の「自由移民」は60人（42.3%）でその内の59人が「呼寄せ」で、呼寄地は大西洋に沿ったサンパウロ州のサントス・ジュキア鉄道沿線や、初期移民の入植地の集団地域として知られるソロカバナ・パウリスタ・ノロエステ・モジアナ鉄道沿線となっている。

他方、戦後移民の場合の「自由移民」は127人（89.4%）でその内の97人が「呼寄せ」で、呼寄地はサンパウロが47人と圧倒的に多く、その他、ジュキア・パウリスタ・ソロカバナ鉄道沿線となっている。これからみても、戦前移民の多数が最初の入植地の農村かサンパウロ大都市圏に移動しながら、農業からフェイラやその他の職業へ転職したことがうかがえる（表10参照）。

戦前移民にとってサントスはブラジル上陸地点であり港湾作業、農業、

表9　フェイラ関係者の渡航形態と居住地

渡航形態	戦前移民	戦後移民
契約・準契約	82	4
自由移民	60	127
呼寄せ	360	127
サントス	8	0
サンパウロ	2	47
ロンドリーナ	1	4
カンポ・グランデ	3	2
カッペン	1	0
ジュキア線	21	9
ソロカバナ線	7	6
パウリスタ線	5	9
ノロエステ線	7	2
アララクアラ線	0	1
モジアナ線	1	2
ドラデンセ線	2	1
その他	0	3
不明	2	11
非呼寄	0	30
開発青年隊	—	12
南米拓殖	—	6
海外移住事業団	—	1
農業移民	—	2
引受人がいた	—	5
その他	—	4
計画移民	0	9
不明	0	2
合計	142	142

表10　フェイラ関係者の居住地

居　住　地	戦前移民	戦後移民
VILA CARRAO	18	4
CASA VERDE	11	20
VILA PRUDENTE	9	6
IPIRANGA	2	4
VILA ALPINA	8	8
VIRA SANTA CLARA	4	9
SAO MATEUS	4	4
SANTO AMARO	4	4
PENHA	2	8
JABAQUARA	2	8
CAMPO LIMPO	1	—
VILA SANTA MARIA	2	2
PATRIARCA	2	—
SANTO ANDRE	17	21
SAO CAETANO DO SUL	11	16
UTINGA	0	1
MAUA	3	—
GUARULHOS	3	16
CACHOEIRA	—	4
SUZANO	0	8
CAMPINAS	2	—
ARARAQUARA	8	—
JABOTICABAL	1	—
SANTOS	4	—
SAO VICENTE	2	—
CEDRO	2	—
SOROCABA	2	—
BAURU	2	—
MARILIA	1	—
BRASILIA	1	—
CAMPO GRANDE	5	—
CUIABA	2	—
LONDRINA	1	—
合　　計	142	142

商業に従事した都市である。サントスからジュキアまでの海岸山脈に沿ったジュキア線は戦前移民にとって稲作、バナナ栽培をおこなった地域であったが、この地域からサンパウロ大都市圏に流れ、フェイラに従事するに至った。

戦前移民にとって「呼寄人」は知人51（41.1%）、兄弟・姉妹26（18.3%）、伯父・伯母14（9.8%）、義兄弟・従兄弟14（9.8%）、夫・父母10（7.0%）である。

戦後移民の「非呼寄」は開発青年隊、南米拓殖、海外移住事業団、農業移民といった特色がある。なお「呼寄人」は伯父・伯母32（22.5%）、知人・友人31（21.8%）、兄弟・姉妹16（11.3%）、夫・父母8（5.6%）、義兄弟・従兄弟7（4.9%）であり、戦後移民に比較して伯父・伯母及び兄弟姉妹の比率が高くなっている。

表10はフェイラ関係者の居住地（調査時における居住地）であるが、戦前移民ではサンパウロ大都市圏のビーラ・カロン、サントアンドレ、カーサベルデ、サンカエタノ、また戦後移民ではサントアンドレ、カーサベルデ、サンカエタノ等でフェイラ関係者が多い。

また、その他のサンパウロ州（表9ではスザーノからマリリアまでの地域）、ブラジリア、南マットグロッソ州（カンポグランデ）、マットグロッソ州（クヤバ）、パラナ州（ロンドリーナ）でもサンパウロ大都市圏の在住経験者がフェイラ関係者となっている。

VI. フェイラへの従事状況

フェイラ関係者が何歳でフェイラに従事し、それが渡航後何年目で在職年数はどの程度であったかをみることは興味深いことである。図3はフェイラに従事した時の年齢を示しているが、戦後移民の場合は戦前移民に比べかなり年齢が若い。これは①サンパウロ大都市圏への呼寄せが多かったこと、②渡航時の年齢がフェイラを行うに適齢に達していたこと、さらに③第二次大戦以降ブラジル社会における社会層に中間層の顕著

な出現がみられ、日系移民のブラジル社会への職業選択の大きな可能性を提供する経済社会構造形成に起因している。

他方、戦前移民は渡航形態と入植地との関係で、①渡航時の年齢が比較的若かったこと、②入植地がサンパウロ大都市圏以外の都市地域（サントス、ロンドリーナ、カンポグランデ）や、農村地域（ジュキア、ソロカバナ、パウリスタ、ノロエステ、アララクアラ、モジアナ沿線上）で、長い間農業に従事していたことに起因している。

図4は渡航後何年目にフェイラに従事したかを示すものであるが、戦前移民は戦後移民と比較して非常に早い時期に従事しており、この理由は前述の移民の特異性によるものである。しかしながらフェイラへの在職年数については両者とも全くの相違がみられない。これは移民のフェイラへの従事時期が第2次大戦後に集中しているためである。

なお、図3～5の総合件数が戦前移民で189件（フェイラ関係者数が142人）、戦後移民で201件（フェイラ関係者が142人）となっているのは、フェイラに従事した回数が戦前移民が1.33回、戦後移民が1.42回であることを示している。戦後移民がフェイラの職業変遷を戦前移民に比べ頻繁に行ったことを示すものである。

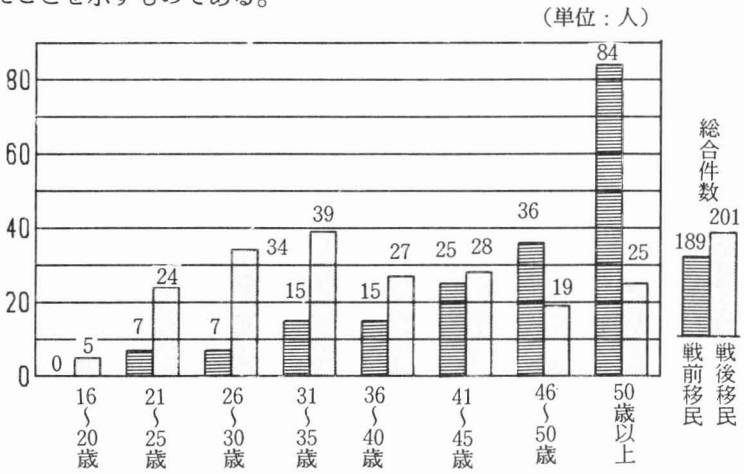

図3　フェイラに従事した時の年令

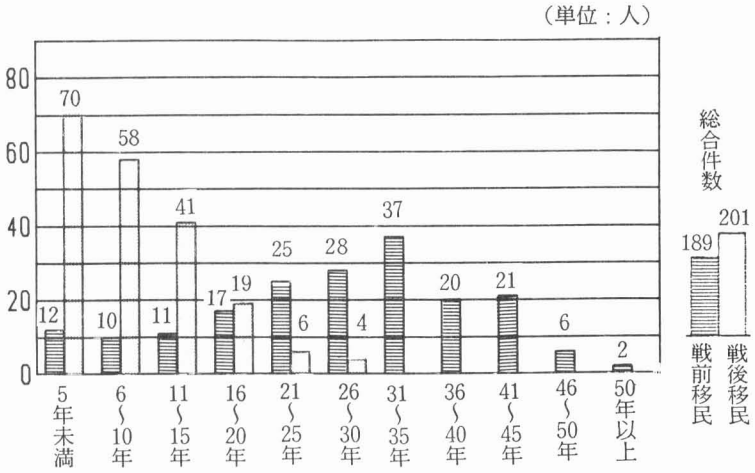

図4　渡航後何年目にフェイラに従事したか

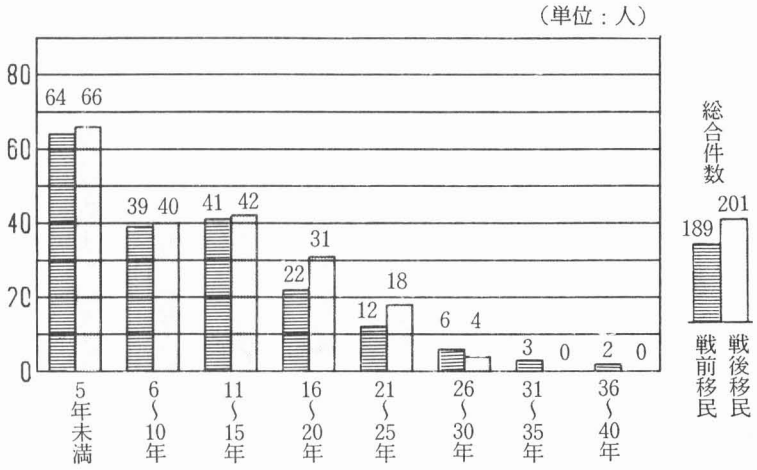

図5　フェイラの在職年数

Ⅶ. 職業・居住地の変遷回数

フェイラ関係者が移民後に職業及び居住地をどれだけ変えたかをみるのが図6及び図7である。ある地域からある地域への空間移動は居住地の移動につながり、また地域特有の環境のもとで職業を行うことから居住地と職業の変遷回数は相関関係が高いと推測できる。

戦前移民と戦後移民の居住地の変遷回数は、戦前移民が歴史的に長いこともあって戦後移民より多いことは容易に理解できる。しかしながら職業の変遷回数は逆に戦後移民のほうが相対的に多い。これは前述したように第2次大戦後のブラジル社会への適応と職業の選択のおおきな可能性によるものであろう。

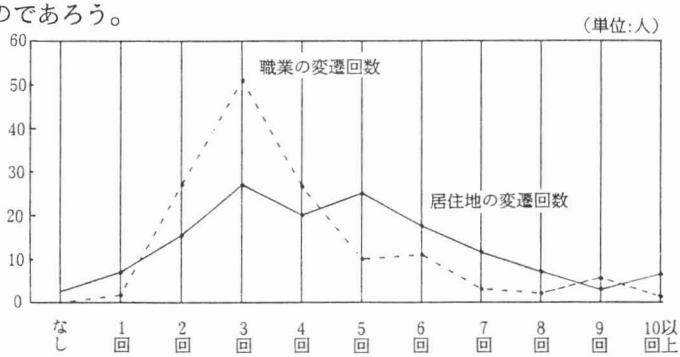

図6　戦前移民の職業・居住地の変遷回数

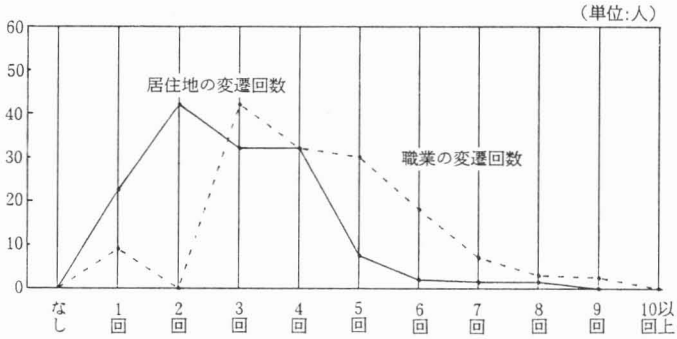

図7　戦後移民の職業・居住地の変遷回数

Ⅷ. 平均在職年数と居住年数

居住年数は戦前・戦後移民の両者において6～10年をピークにしていることからほぼ一致している。しかしながら在職年数においては戦前移民のほうが戦後移民に比べ長くなっている。これは戦前移民が長い農業生活を営んでいたことと、戦後移民の歴史が短いことに起因していると解釈できよう。（図8、図9参照）

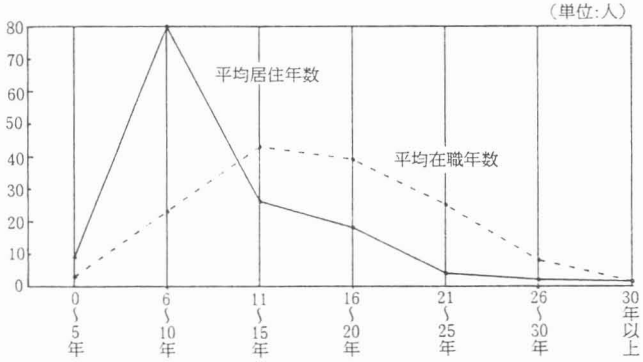

図8　戦前移民の平均在職年数・居住年数

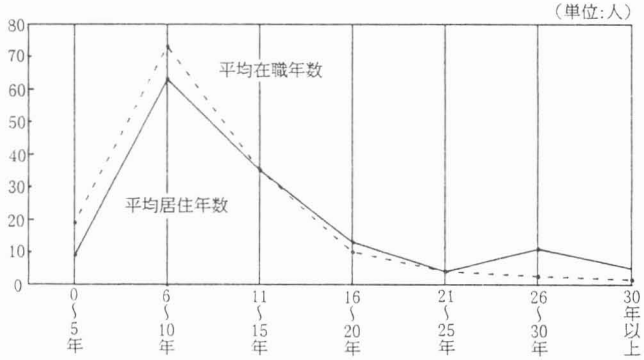

図9　戦後移民の平均在職年数・居住年数

IX. 居住地域の移動変遷

表11及び表12は戦前・戦後移民の居住地域移動の地域別移動頻度を示したものである。

戦前移民の居住地域移動は、初期段階は農村地域のジュキア・ソロカバナ、パウリスタ沿線、さらに都市地域のサントス、ロンドリーナ、カンポグランデからサンパウロ大都市圏への移動が活発であったことがうかがえる。サンパウロ大都市圏への集中量は189件で発生量の82件を大幅に上回り詳細には、サンパウロ大都市圏内の移動は71件、農村地域からの移動が108件及び都市地域からの移動が10件となっている。

それぞれの農村地域・都市地域内移動は661件の総移動量の内240件（36.3%）と極めて多い。

他方、サンパウロ大都市からの移動はブラジリア1件、ジュキア沿線2件、パウリスタ沿線1件、ノロエステ沿線2件、アララクアラ沿線1件となっており、いかにサンパウロ大都市への集中量が高いかがわかる。

総移動件数の661件はフェイラ関係者が142人であることから1人平均4.65回である。

戦後移民の居住地域移動は、サンパウロ大都市圏内移動が164件（総移動数の260件の63%）が主となるが、初期の移動は戦前移民と同様、農村地域のジュキア・ソロカバナ、パウリスタ沿線、さらに都市地域のサントス、ロンドリーナ、カンポグランデからサンパウロ大都市への移動が活発であった。

サンパウロ大都市圏への集中量は235件（90.4%）となっており戦前移民と比較して相対的に都市地域・農村地域内の移動は少ない。

総移動数の260件は戦後移民のフェイラ関係者が142人であることから1人平均1.83回の移動回数となる。これは戦後移民の4.65回を大幅に下回っている。

表11　戦前移民の居住地域移動の地域別頻度（移動件数）

区分	居住地＼区分・移動先地	S.P	都市地域					農村地域							外国	発生量
		1	2	3	4	5		6	7	8	9	10	11	12	13	
S.P	1サンパウロ	71				1		2		1	2	1			4	82
都	2サントス	3	4		1			5	9	7	3	3			3	38
市	3ロンドリーナ	6		5				3	1	1		1				17
地	4カンポグランデ	1			11						2			1	1	16
域	5カッペ・ブラジリア				1	1								1		3
	6ジュキア沿線	28	12		4			43	3	1	3				1	95
農	7ソロカバナ沿線	31	4	4				2	57	13	2	1		1		115
村	8パウリスタ沿線	29	2	3				4	18	38	6	5		3	1	109
地	9ノロエステ沿線	8	3					3	4	24	38		1		1	82
域	10アララクワラ沿線	3	2						3	1	2	18				29
	11モジアナ沿線	2						5	8	5	5	2	23	1		51
	12その他の農村	3	1					1		1	2	1			2	11
外国	13外国	4	2		1					2	1				3	13
集中量		189	30	12	18	2		68	103	94	66	32	24	7	16	661

表12　戦後移民の居住地域移動の地域別移動頻度（移動件数）

区分	居住地＼区分・移動先地	S.P	都市地域					農村地域							外国	発生量
		1	2	3	4	5		6	7	8	9	10	11	12	13	
S.P	1サンパウロ	164	1							1					1	167
都	2サントス	3														3
市	3ロンドリーナ	11		1												12
地	4カンポグランデ	4	1		4									1		10
域	5カッペン	2														2
	6ジュキア沿線	14						2								16
農	7ソロカバナ沿線	8							1	1						10
村	8パウリスタ沿線	15			1				2	4						22
地	9ノロエステ沿線	3								1						4
域	10アララクワラ沿線	1										1				2
	11モジアナ沿線															0
	12その他の農村	2														2
外国	13外国	8													2	10
集中量		235	2	2	4	0		2	3	7	0	1	0	1	3	260

X．模合・現地金融機関の利用状況

模合活動は移民にとって現地金融機関の利用以上に重要なものである。模合活動は現地沖縄においても助けあい、付き合い、資金調達、金融の便等の理由でいまなお活発であり、移民初期においては慣れない他国で知人・友人、親戚、兄弟・姉妹を中心としたこの活動は如何に重要であったかが理解できる。

表13は模合の参加状況を、また表14は模合参加数を示したものである。戦前移民の模合参加状況は142人中107人（75.4％）、戦後移民の場合は142人全員となっているが、前者の場合の比率が低いのは調査時点で既に隠居の身となった戸主が多数含まれることに起因する。

現在、南米諸国は軒並みに債務の累積のためインフレーションが著しく貨幣価値が短期間に激変している。このような状況下での模合が不合理であることに原因して現在では模合実施が下火となっており、模合に金を出すより銀行預金の利子の方が利回りがよい[5]こともあって、現地金融機関利用も両者80％以上と高い（表15参照）。

表13　模合参加状況

	参 加	助け合い	つきあい	資金調達	金融の便	不　明
戦前移民	107	50	43	49	7	5
戦後移民	142	46	83	70	24	20
合　計	249	96	126	119	31	25

表14　模合参加数

参加数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上	不明
戦前移民	29	14	22	17	6	4	4	3	1	4	3
戦後移民	15	11	10	18	18	12	7	7	4	31	1
合　計	44	25	32	35	24	16	11	10	5	35	4

表15　現地金融機関の利用

	利用している	利用していない	不　明	計
戦前移民	101	41	1	142
戦後移民	118	21	3	142
合　計	219	62	4	284

XI. 渡航前の職業・本籍地・出生地

表16は親及び本人の渡航前の職業を示すものである。戦前移民においては両者において農業が圧倒的で、移民のほとんどが第1次産業の子弟であることが分かる。これは当時の沖縄の現状、及び移民の本籍地・出生地が島尻郡、中頭郡、国頭郡の農村地域に属していることからも容易に理解できる（表17）。なお工業や商業も比較的多いのは、これらの農村地域に当時「パナマ帽編み」や芭蕉布などの「機織り」があった為である[6]。

戦前移民の本人の職業が無職は当時の移民形態の「構成家族」制度によるものであり就学半ばにして移民を余儀なくされた結果である。

一方、戦後移民の本人の職業に水産業が50%以上となっているのが特徴的である。

なお表16及び17には、サンプル総数（戦前移民の場合は527件、戦後移民の場合は272件）の内訳も並行して表示してある。これは渡航前の職業がフェイラを職業として選択するのに影響を与えたかをみるためであったが、これについては明確な職種による影響力は認められない。

表16 渡航前の職業

（カッコ内はサンプル総数）

渡航前の職業	親		本人	
	戦前移民	戦後移民	戦前移民	戦後移民
農業	114 (449)	108 (212)	92 (326)	46 (92)
水産業	5 (6)	1 (1)	6 (11)	73 (142)
半農半漁	3 (5)	0 (0)	3 (5)	1 (1)
工業	7 (23)	6 (11)	12 (44)	6 (11)
商業	2 (14)	6 (8)	8 (17)	4 (6)
運送業	1 (2)	0 (2)	1 (8)	0 (1)
サービス業	0 (1)	0 (0)	2 (11)	0 (0)
自由業	1 (3)	2 (2)	1 (6)	2 (2)
公務員	6 (12)	5 (8)	3 (13)	3 (4)
無職	0 (3)	0 (1)	13 (76)	1 (1)
その他	1 (5)	2 (7)	1 (7)	1 (6)
不明	2 (4)	11 (20)	0 (3)	5 (6)
合計	142 (527)	142 (272)	142 (527)	142 (272)

表17　本籍地・出生地

（カッコ内はサンプル総数）

本籍地・出生地	本籍地		出生地
	戦前移民	戦後移民	戦後移民
那覇	1 (9)	4 (6)	4 (8)
首里	1 (3)	1 (1)	1 (1)
島尻郡	42 (137)	69 (128)	65 (120)
糸満	1 (2)	11 (12)	11 (12)
小禄	8 (30)	3 (20)	3 (18)
豊見城	1 (9)	4 (7)	4 (6)
兼城	3 (3)	3 (3)	3 (3)
東風平	4 (20)	6 (18)	5 (17)
高嶺	0 (1)	2 (3)	2 (4)
真壁	3 (9)	7 (7)	6 (6)
摩文仁	0 (0)	2 (2)	2 (2)
具志頭	4 (5)	5 (7)	5 (7)
玉城	1 (1)	1 (1)	1 (1)
知念	1 (4)	1 (5)	1 (5)
佐敷	7 (19)	0 (2)	0 (2)
大里	7 (21)	8 (18)	8 (17)
南風原	0 (7)	4 (6)	4 (6)
真和志	0 (2)	1 (1)	0 (0)
仲里	0 (0)	1 (2)	1 (2)
具志川	0 (2)	8 (12)	7 (10)
伊平屋	2 (2)	2 (2)	2 (2)
中頭郡	64 (178)	40 (85)	35 (77)
浦添	6 (14)	6 (11)	6 (11)
西原	7 (16)	3 (9)	4 (10)
宜野湾	1 (8)	1 (5)	1 (3)
中城	11 (37)	7 (13)	5 (11)
北谷	2 (5)	3 (5)	2 (5)
読谷山	3 (6)	1 (8)	2 (9)
越来	3 (12)	2 (4)	2 (4)
美里	5 (16)	6 (11)	4 (8)
具志川	23 (51)	10 (17)	8 (15)
与那城	2 (10)	0 (0)	0 (0)
勝連	1 (3)	1 (2)	1 (1)
国頭郡	33 (199)	26 (48)	21 (38)
名護	0 (15)	6 (8)	6 (8)
恩納	1 (8)	0 (4)	0 (2)
金武	2 (15)	4 (5)	2 (2)
久志	2 (9)	2 (4)	2 (4)
東	3 (5)	1 (3)	1 (4)
国頭	4 (19)	4 (6)	3 (5)
大宜味	1 (9)	3 (6)	3 (5)
羽地	6 (56)	0 (3)	0 (1)
今帰仁	11 (44)	5 (7)	3 (5)
本部	3 (18)	0 (1)	0 (1)
伊江	0 (1)	1 (1)	1 (1)
宮古郡	0 (0)	1 (2)	1 (2)
八重山郡	1 (1)	0 (1)	0 (0)
その他	0 (0)	0 (0)	15 (26)
合計	142 (527)	142 (272)	142 (272)

XII. フェイランテの経済活動状況

フェイラの形態と景観については別の機会に詳述することにするが、ここでは通りや広場におけるフェイラでの取扱商品の配列について概略を述べることにする。

フェイランテが毎年更新する免許書には、一週間のフェイラが開設される地区（bairro）名が記入されている。しかし、具体的にどの広場あるいは通りで市場を開設するかについて明記していない。各フェイランテは一週間のフェイラが開設される通りを知っているがその通り名称を記憶していない場合が多い。

フェイラはその通りが特に工事あるいはその他の事由で一時完全使用が困難な場合を除いて定着した通りで開設され、過去20〜30年も同じ通りがフェイラに使用されている事例が多数確認された。フェイラは前述したようにその地区の諸条件を考慮して場所を設定するが、フェイラが開かれる通りは一般に一つの通りの空間を利用する。

時にはT字型あるいはL字型の通りを使用する場合もあるが、一つの通りを利用する際には他の主要道路と接続する通りの入口から、取扱商品別にバンカ（banca:取扱う商品、例えば野菜・果物などを載せる仕事台）の配列が決まる。最初に冷蔵冷凍施設をもつ車両をバンカの一部として使用する肉（牛肉や豚肉とその臓物）、鶏肉、魚のフェイラである。次にかなり重量の大きい商品、例えば、ジャガイモ、玉葱、果物、野菜が一つの通りのフェイラの中央部のかなりの広さの空間を占める。大きなフェイラでは肉類の一角に燻製品や乳製品のフェイラが位置する。

次に日用雑貨の店が並ぶ。台所用品、裁縫用品、玩具などに続いて衣料品の出店が並ぶ。切花を扱う花屋は入口付近に位置する場合が多いが、鉢物を扱う広い空間を使用する店は通りの端付近に位置する。

フェイラにはフェイランテと買物客対象に飲食のサービスをする店が立つ。パステース(揚げ物)を売るパステリヤが通りの両端口に数店位置する。

大きいフェイラでは通りの中央にも立地する。また、出口に当たる通りの端付近にサトウキビ汁をサービスする搾汁機を設置した車両がどのフェイラでもみられる。

フェイラにおけるフェイランテは所与のバンカをテントで天蓋を作り商いを行う。フェイラの通りの中でテント無しで路上あるいは任意の箱で商いをしているもぐりのフェイランテもみられるが、これは休業しているフェイランテの場所を利用している場合である。

以上、フェイラの通りにおける空間配置を概観したが、これから、沖縄県出身のフェイランテがどのような商品を取扱い、フェイラで活動しているかについてみてみよう。フェイランテの事例研究は別の機会に行うことにし、本稿では主要な品物を取扱うフェイラテについて述べることにする。

既報「ブラジルにおける沖縄県出の職業変遷〜第二、第三次産業〜」で概観したが[7]、現在でもかなりの移民がフェイラに従事している。1979年から1980年にかけての戦前移民、1984年の戦後移民のアンケート調査において、移民がフェイラにおいてどのような商品を取扱ったかについての詳細な調査をしていないので明確に取扱商品によるフェイランテの分類は困難である。しかし、多くのフェイランテが野菜、果物を取扱っていることは一般に知られている。

フェイラで販売される商品の約70%は、中央卸市場（CEAGESP）から仕入れされているといわれるが、近郊農園（chacara）で、蔬菜栽培している者はその生産物を自分のフェイラで販売する場合があり、このシャーカラ農家は蔬菜栽培とフェイラにおける野菜販売を兼ねる事例である。この場合、親はシャーカラ、息子はフェイランテとそれぞれ役割を分担している。

CEAGESPの日報によると、野菜の中には、果菜、根菜、葉菜の種類別と、それぞれの等級別の卸価格表があり、フェイランテは火曜日から日曜日の各フェイラにおいて販売する野菜の種類と量を週３回から４回ほど仕入れて準備する。農産物も移民の生活と密接なかかわりをもち、且つよく知っ

ている商品として野菜を扱うフェイランテが多いのは容易にうなずけよう。

表3に示されているように、根菜のうちで、ジャガイモ、玉葱、ニンニクはフェイラにおける取扱品の分類の項目の一つとして分類されていることは、ブラジルの食生活に依拠としたものであろう。県人のフェイランテの中でもこの商品を取扱う店の事例がかなり確認されたことからも、この分類が重要なフェイランテのひとつであることがうかがえる。

野菜フェイランテに次ぐ、あるいはほぼ匹敵するのが果物を扱うフェイランテである。彼等は取扱う品の殆どを中央卸市場に依存している。野菜同様に果物についてもCEAGESP日報の明細価格によって仕入れを行う。野菜は容量が大きく、果物は重量が大きい商品である。ブラジルは果物の豊富な国である。年中温帯から熱帯地域でとれる数多くの果物が市場に出まわっている。秋から冬にかけて果物の中心はオレンジである。ここ数年世界一のオレンジ生産を誇るブラジルである。一日のフェイラで販売する果物の重量の約半分はオレンジである事例が目立っていた。

果物の中でもバナナは特別に単独の果物としてフェイラで取扱われている。種類は5〜6種類あり、加えて料理用のバナナも売られている。県出身者のフェイランテにもバナナ専門に店を開いている事例が各地区のフェイラでみられた。

各地区のフェイラで県出身がきわめて目立つのは、野菜と果物を取扱うフェイランテとしてであるか、他に卵を専門に扱う店が挙げられる。しかし、前二者に比較してその数はかなり少ないと推測される。また、これまで魚、鶏肉を扱う県出身のフェイランテはみられなかった。しかし、魚のフェイランテは他の日系移民が扱っている場合が各地区のフェイラでみられる。

それぞれの移民の母国の文化を反映しているのだろうか、一般に魚以外の肉類は白人系の独占分野の印象を受けるほど、殆どの場合、肉のフェイランテは白人であると思われる。時たま日系の鶏肉を取扱っている場合があるが、県出身者で牛、豚肉と臓物を取扱うフェイランテとして2店の事

例を確認した。

表3にみるように生鮮肉類を取扱うフェイランテは一つのフェイラにおいてもその数は多くない。その中の一店は事例研究として別の機会に詳述したいと思う。

切花および鉢物を扱う県出身のフェイランテについては確認することができなかったが、両者とも日系人が扱っている事例は確認された。

かつて、穀類の取扱量はかなりの割合を占めていた。1967年に1,042のフェイランテが穀類を取扱っていた。1972年にはこの分野のフェイランテは全体の9.5%を占めていたが、1976年には全体のわずか4.5%に減少している。その地位はジャガイモ、玉葱、ニンニクにとってかわっているという。

穀類取扱が減少した理由として、フェイラが生鮮食料品を扱うことに適した機能がより明確に発揮されるようになり、その結果、サンパウロ州およびサンパウロ市の食料配給局が穀類の取扱量を抑制するように指導したことに原因している。

これは既存の穀物商との競争を配慮した結果であるが、そのために低所得層への穀類供給が悪化したことも事実である。

1980年の調査時において、県出身フェイランテが自宅の一角に倉庫をもち、大量の穀類を取扱っている事例に出会ったが、サンプルの中にはついに確認されていない。現在でも、都市の中間地域および縁辺地域におけるフェイラでは穀類を扱うフェイラがかなりみられる。

表3の分類にある項目の中で、その他の分野について殆ど確認できなかった。しかし、フェイラにはフェイラの市場に参加する人々へのサービスを担う分野がある。それはパステラリヤである。フェイラで買物をする客へのスナックとしてどのフェイラでもみられる最も強力な出店がパステラリヤである。前述したように、フェイラの空間配置において特異の位置をなしている。しかも、パステラリヤは現在のフェイラにおいて何処にでもみられる出店の一つである。そこでは、5～6種のパステースとジュースや

コーラをサービスする。パステラリヤはフェイランテの構成員であることを指摘しておく。

小麦粉で作った薄い14〜15センチ方形の生地の中に、ひき肉やチーズなどの中味を入れたものを油で揚げたものがパステースである。いとも簡単な家内工場で作った生地をフェイラの出店で沸騰した油鍋に投入すると膨張したパステースが2〜3分でできあがる。ふくらんで中みがかなり空っぽな形態をしていることから日系移民の間では「空気てんぷら」という俗称がつけられているものである。このパステースが特にフェイラでは立食いの軽食として広く親しまれている。

表3の分類11の麺類のひとつが、パステースを作るパステラリヤ（揚げ物屋）に該当し、フェイランテが取扱う商品である。パステースの生地は最初はロールにし、それから中味を入れて揚物にするが、買物客はロールにしたパステースの生地を購入して、家庭でパステースを料理することもある。しかし、生地の殆どはパステースとしてフェイラで料理され、販売しているのが現状である。

カフェー店はフェイラに存在しない。早朝フェイラの店作りの頃に魔法瓶に入ったコーヒーをフェイランテにサービスする者がいるが、生鮮飲料水とパステースをサービスするパステラリアが最も一般的な軽食店の形態である。

どのフェイラを訪れてもパステラリヤの店をのぞいて出身地をたずねると60〜70％の店が沖縄県出身者であった。それほどフェイラにおけるパステラリヤには沖縄県出身者が多いことが知らている。サンパウロ市フェイランテ組合の中でもパステラリヤの大半が沖縄県出身者で占められているという。その為、パステラリヤに関する利権争いも沖縄県出身者間でしばしば問題になるということであった。アンケート調査においてパステラリヤが特に明記されていないため具体的な統計はおぼつかないが、フェイラにおいて目立って分野のひとつとして挙げることができる。

以上フェイラおよびフェイランテについて述べたが、大型小売の形態で

あるフェイラに対して密接な関係をもつ大型小売に「バレジョン」と「サコロン」がある。これらの小売形態はフェイラに強い影響を及ぼす存在である。いずれの形態も行政当局が低所得者層へ、より安価の生鮮食料品を提供することを目的に制定した小売方式で、価格は当局によって決められ、かつ商品の価格はフェイラより安い。

これら小売は既存のフェイラの空隙にわりこみフェイラの販売と買物客の減少を脅かすためフェイランテは常にこれら小売形態に強い関心を配っている。

バレジョン（varejão）とは大型小売を意味している。これは州および市当局が直接小売市場を設定し、小売業者は当局の指示した価格で販売を行う。場所は卸市場や各地の市場の屋内で行う。小売業者はフェイランテと同様に当局から免許を得て販売を行う。取扱商品は野菜と果物が大半で場所によっては肉を扱っている場合もみられる。

中央卸市場（CEAGESP）の資料によると、1984年現在サンパウロ大都市圏において実施しているバレジョンは全部で20カ所であった。場所は都心や商店街からはずれた地域に設立するという配慮がなされている。開設数と開設日は次の通りである。

水曜日　3カ所
木曜日　4カ所
金曜日　4カ所
土曜日　4カ所
日曜日　5カ所

バレジョンの開設は1979年に1カ所、1980年3カ所、1981年4カ所、1982年11カ所、1983年1カ所となっている。

バレジョンにおける小売業がフェイラより有利であるかどうかについては未詳だが、フェイランテがバレジョンの小売業に転向した事例は多くみられた。またバレジョンから再びフェイラに戻った事例も確認された。いずれのバレジョンにおいてもかなりの県出身者（2・3世も含む）が活躍

している。

サコロン（sacolão）は市食料供給部の管理の下で各地区（bairro）単位に実施する小売形態である。販売商品は野菜と果物類に限定され、キロ単位の価格で販売する。価格は市当局との契約書の指示に従って決められる。サコロンとは大きい買物袋のことをいい、買物客は大量にしかもフェイラやバレジョンより安く購入できるという有利性がある。キロ当たり価格の販売であるので、野菜と果物の種類に関係なく、一袋あるいは一箱の重量で価格を決定するという極めて大雑把な買物である。故に取扱商品の品質はフェイラやバレジョンより劣り、どちらかといえば大売出しの店の景観を呈している。

サコロンは各地区の自治会員、団地の居住者、そして宗教団体に限り免許が与えられる制度である。店は各地の教会付属の建物やその他大きな建物の屋内で開設され、週2回から3回の頻度で販売が行われる。宗教団体以外のサコロン業者に、かつてフェイラに従事した沖縄県出身者数名が共同で経営している事例があった。開設時間はフェイラやバレッジョンと同様、朝6時から12時まで。店開き毎に大量の仕入れを行い、薄利多売による商法は必ずしも安定した経営ではないようだ。なお、サコロンは1983年から開始されており、その運営と経済的効果については実験段階の小売形態である。

XIII 総　括

サンパウロ市の発展に伴いブラジル社会の要請に基づいて発達したフェイラは今日ではサンパウロ州のみではなくブラジル各地で実施されるようになり、ブラジル社会独特の小売形態として定着している。その形態は地域により多少の相違はみられるもののフェイラは地方においても機能し、またフェイラは市街地、地方小都市において特異の景観を形成する市場である。

サンプルによると、戦前移民についてみると沖縄県出身移民は1925年からフェイラとかかわりをもっている。以後1940年までフェイラへの従事者数は微増傾向をみせるが、ブラジル社会の工業化と移民の農村社会から都市への流入が顕著になった1950年代初期に至りフェイラ従事者数は急増している。やがて1960年末期にフェイラ従事者数はピークに達し、1970年代に至り漸減傾向に示している。それは戦前移民の老齢化と深く関係をもつ推移である。

戦後移民とフェイラとの関係をみると、1951年頃から既にフェイラに従事した者が出現しているが、1950中期か1960年までの期間に急増をみせている。この推移は戦後移民の急増した時期と明確に対応している。一方、定着した職業としてフェイランテ数は1950年後期から急増を示している。これらは農業移民が都市へ転出し都市的職業へ従事していく時代と深くかかわっており、大半の移民が都市社会型移民に転換する時期とほぼ一致する。都市において多くの戦前・戦後移民がフェイラに従事した時期が1950年後期から1960年代である。

戦後移民のフェイランテ数は1970年代まで増加傾向を示すが1980年からわずかながら減少傾向をみせている。都市における財産形成の初期段階の職業としてのフェイランテが、やがて別の職業へ移行していく。初期的変化の徴候が顕在化していく一つの傾向といえよう。

しかし、フェイランテはサンパウロ大都市圏に居住する沖縄県出身移民社会では最も従事者の多い職業であることに変りはない。フェイランテを訪れると多数の県出身者のフェイランテに出会う。戦前移民の老齢化にかわり2・3世のフェイランテが非常に目立つ。

フェイラにおける取扱商品をみると、日系移民全体としても言えることだが、多数のフェイランテが野菜および果物を扱っていると推測される。他に上記の商品の中で、別項目になっているジャガイモ、玉葱、ニンニクのフェイランテ、バナナ専門のフェイランテも目立つ存在である。またフェイラにおけるパステラリヤが特に沖縄県出身者によって大半が占められている

ことは沖縄県出身者移民のフェイランテの特徴の一つとして挙げられよう。

本稿においてフェイランテの事例研究について言及できなかったが、別の機会にゆずりたいと思う。

（謝 辞）

本稿を執筆するにあたって、比嘉マリアさんにはいろいろご教示を受けた。記して感謝を申しあげる。

（注）

(1) 島袋伸三・米盛徳市（1982）琉球大学法文学部紀要（史学・地理学篇）第25号、pp.57〜122.

(2) 島袋伸三（1986）琉球大学法文学部紀要（史学・地理学篇）第29、pp.29〜54.

(3) Guimaraes,Olmaria（1969）O Papel das Feira－Livres no Abastecimento da Cidade de São Paulo,USP

(4) Secretaria da Agricultura do Estado de São Paulo（1977年　5月）資料

(5) 中山・石川・島袋・大城・米盛・町田、「南米におけう沖縄県出身移民に関する地理学的研究（Ⅱ）」、（1986年　3月）

(6) 田里・中山・石川・島袋・目崎、「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」、（1981年　3月）、pp.62.

(7) Secretaria da Agricultura do Estado de São Paulo（1977年　5月）pp 2，37〜38.

（参考文献）

1．島袋伸三（1986）「ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷—第二・三次

産業－」琉球大学法文学部紀要　史学・地理学篇　第29号、pp.29～54.

2．島袋伸三・米盛徳市（1982）「ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷－農業を中心に－」琉球大学法文学部紀要　史学・地理学篇　第25号、pp.57～122.

3．中山・石川・島袋・米盛・町田（1986）「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究（Ⅱ）－ボリビア・ブラジル－」琉球大学法文学部地理学教室

4．田里・中山・石川・島袋・目崎（1981）「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」琉球大学法文学部地理学教室

5．Guimaraes, Olmaria (1969) O Papel das Feira－Livres no Abastecimento da Cidade de São Paulo, Instituto de Geografia, Universidade de São Paulo, S.P.

6．Secretaria da Agricultura do Estado de São Paulo (1977, Maio) Abastecimento da Periferia da Grande São Paulo

（執筆分担：Ⅰ～Ⅲ、Ⅻ～写真、島袋、Ⅳ～Ⅺ、米盛）

写真１　1984年８月25日にフェイラ開設70周年記念を祝う。そして８月25日は「フェイラの日」となっている。沖縄県出身移民が最初にフェイラに従事したのは1925年のことである。紐に値段票を洗濯鋏でつるし野菜を売っている挿絵はフェイラの風景をよく捉えている。（São Paulo州フェイラ組合提供）

写真2　18世紀にフェイラの先がけとなったカシンニャ（Casinha）が並ぶ市場ができたRua de Quitandaの通り付近。現在はSão Paulo市の中心街で金融機関が集中している地区となっている。通りは真夏のクリスマスデコレーションで賑わっている。（1979年　島袋撮影）

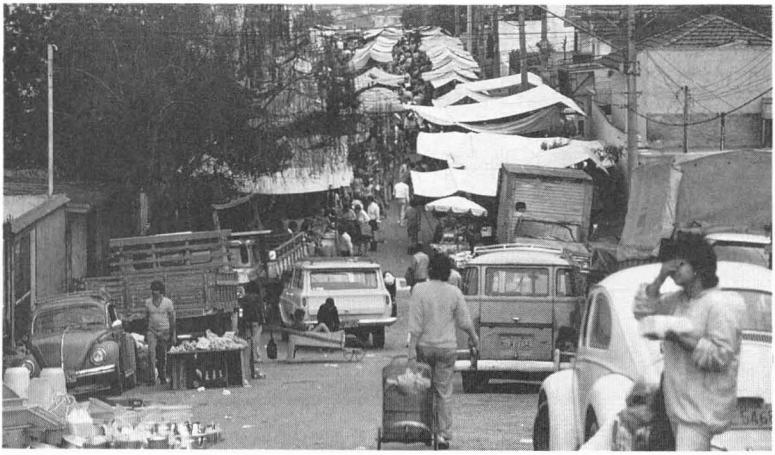

写真3　早朝6時前にフェイラの設営が始まる。品物を陳列して通りの準備がすむのが6時半頃、客を迎える前のフェイラのたたずまい。フェイラ付近の通りはトラックや客の車両の駐車場となる。（1984年　島袋撮影）

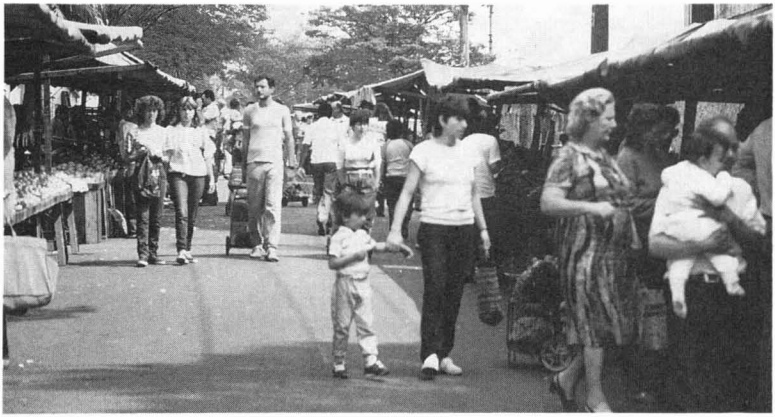

写真4　気の早い客は6時半から姿をみせる。育ちのよさそうな上品な老女性が目だつ。女中あるいは子供をしたがえてやって来る。通りが賑わうのは8時頃から。ドミンゴフェイラの際は通りは混雑する。（1984年島袋撮影）

写真5　フェイラの通りで中心的商品である野菜フェイラの風景。野菜を陳列した台（バンカ）の上にそれぞれの野菜の値段票がつるしてある。鮮度が変り易い葉菜は値段が2回から3回変わることがある。（1984年島袋撮影）

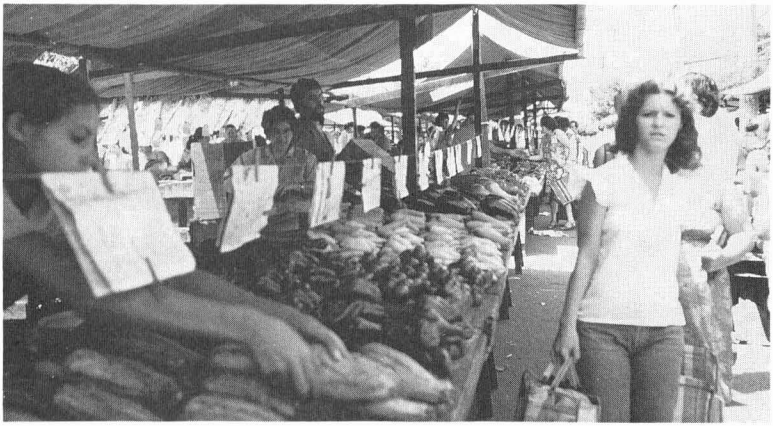

写真6　野菜の中で特にトマトが細分類されている。しかし、フェイラでは葉菜専門と果物専門のフェイランに分類できる。特にトマト専門のフェイランテはそれほど多くないようだ。大根てんさいなどの根菜は葉菜部門で取扱われている。（1979年　島袋撮影）

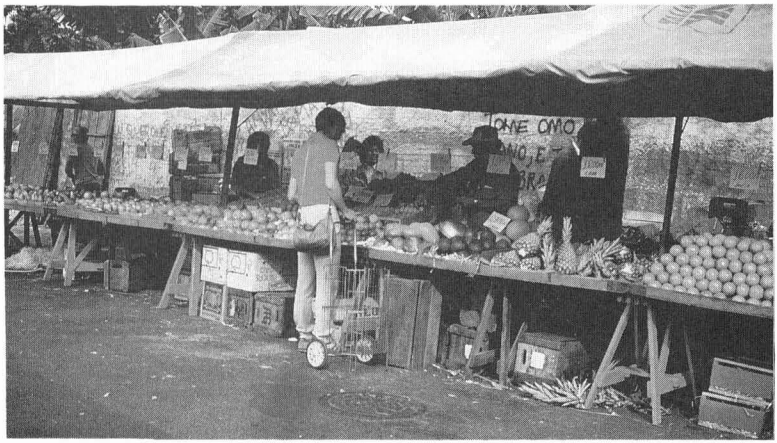

写真7　ブラジルは果物の豊富な国である。アルゼンチン、アマゾンや各地から入荷する果物の種類は一年を通して大きく変わらない。日本でつくられた品種のリンゴも広く出まわっている。ブラジルはここ数年オレンジの生産は世界第1である。（1984年　島袋撮影）

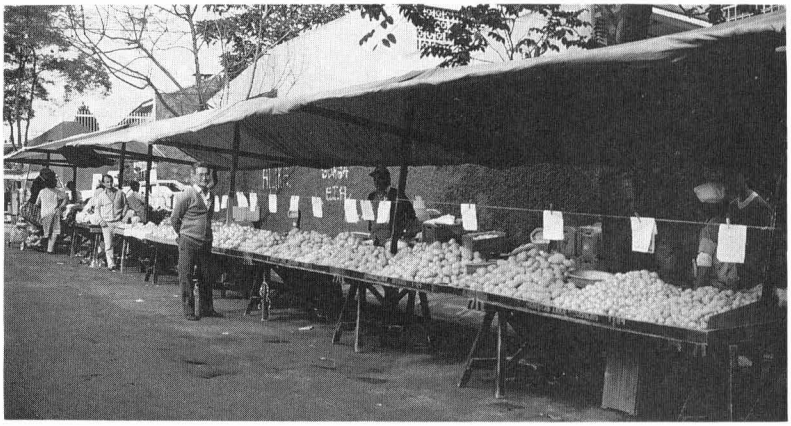

写真8　ブラジルの食文化を反映したものであろうか、根菜の中でもジャガイモ、玉葱、ニンニクはフェイラの中で独立分類となっている。他に甘藷、マンジョウカも広く売られている。（1984年　島袋撮影）

写真9　バレジョン、サコロンがフェイラの売上げにかなりのインパクトを与えている。特にバレジョンは州・市当局の監督の下に着実に市場を拡大している。品質でバレジョンやサコロンに競争しつつフェイラは自らの将来を模索しなければならないかも知れない。（1984年　島袋撮影）

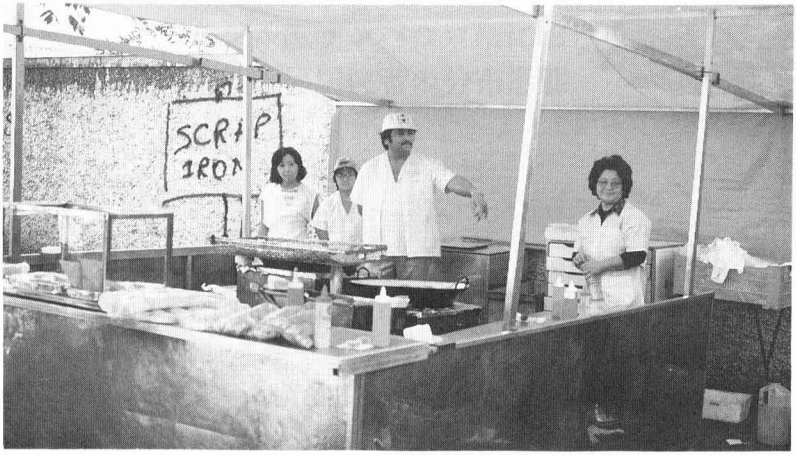

写真10　買物客はパステラリアでしばし立止まりパステースをほほばる。フェイラの出入口に必ず出店がみられ、しかもパステラリアの大半のフェイランテが日系人であり、かつその殆どが県出身であるという。（1984年　島袋撮影）

写真11　サトウキビ汁がサンパウロ市街地の中心で売られている。フェイラにおいても必ずみられるのが写真にあるような風景である。その立地はフェイラの通りの末端である。（1984年　島袋撮影）